『大いなる遺産』『アーサー王の死』『マクベス』

── 英文学作品を換骨奪胎するJ. K. Rowling

小　島　基　洋

ハリー・ポッター（Harry Potter）シリーズには文学の記憶が集積している。ギリシャ古典から現代文学にまで至る名作との類似点が網羅された研究書まで存在する（Granger, Spencer, Groves）。本稿では、シリーズ各巻に影響を与えたと思しき英文学作品を精選した。その際に留意したのは、当該作品が本シリーズとモチーフを共有しているか否かではなく（そういった作品は無数にある）、基本的な物語構造ならびにテーマを共有するか否かである。すなわち、作者J. K. ローリング（J. K. Rowling）が、作品を執筆する為に換骨奪胎した（そして、その事実を秘した）基礎的な文献を探り当てることが本稿の目的である。なお、本稿では紙幅の都合上、基本的なアイディアを提示するに留め、各論の詳細は稿を改めることとする。

『アズカバンの囚人』と『大いなる遺産』

第三作『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』（*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban,* 1999）の構想は、チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）の『大いなる遺産』（*Great Expectations,* 1861）を換骨奪胎するとこ

ろから始まったに違いない。ローリングはディケンズの愛読者であることを明言しているのだが（Parker）、研究史の中では、孤児（Granger 17–9）、連続物である点（Groves 149–50）など、大まかな共通点が指摘されるに留まり、特定の作品の影響が詳しく検討されてはいないのが現状である。

『アズカバンの囚人』と『大いなる遺産』に共通して描かれているのは、ある脱獄囚と主人公の間に結ばれた奇妙な友愛関係である。『大いなる遺産』においては、少年ピップ（Pip）を脅迫して食べ物を手に入れた脱獄囚マグウィッチ（Magwitch）が、それを恩義に感じ、ピップに匿名で財産を譲り渡すことになる。一方、『アズカバンの囚人』では、少年ハリーの命を狙うべく脱獄をしたシリウス（Sirius）が、実は箒ファイアー・ボルトの贈り主であり、ハリーの味方であったことが判明する。最終的に、主人公たちは脱獄囚に親愛の情を抱き、彼らの更なる逃亡に手を貸すのだが、そういった展開までもが共通しているのは偶然ではないだろう。

『大いなる遺産』の『アズカバンの囚人』への影響は、物語展開にとどまらず、作品の中心をなすテーマにも及ぶ。すなわち、理想の〈父〉とは誰か、という問いがそれである。前者の主人公ピップは、両親を亡くしており、姉夫婦に養育されているのだが、義兄の弟子となって鍛冶屋になることに抵抗を感じもする。そこにピップの「後見人」（guardian）として弁護士が現れ、「謎のパトロン」（mysterious patron）によって彼に渡された「大いなる遺産」（great expectations）の存在を明かす（Dickens 119; ch. 18）。一体、パトロンの正体は誰なのか ── この謎をめぐって物語が展開するのだが、言い換えれば、本作の中心的なテーマは、〈父性〉の探求だと言えるだろう。一方、孤児ハリーにも、あるべき〈父性〉が欠落している。遠足に行く為に必要な「保護者」（guardian）の署名を叔父に拒絶されたハリーは（27; ch. 2）、魔法大臣ファッジ（Fudge）（55; ch. 3）、教頭マクゴナガル（McGonagal）（164; ch. 8）に許可を願い出るもの断られる。最終的に署名をしたのは、ハリーの「代父」（godfather）であることが判明した脱獄囚シリウスであった（466; ch. 22）。

『大いなる遺産』が参照されたことは、『アズカバンの囚人』でハリーが苦労して習得する呪文「エクスペクト・パトローナム」（Expecto Patronum）にも示唆されているのかもしれない。この呪文は、動物の「守護霊」（spirit guardian）を空中に作り出すことで、アズカバン監獄の吸魂鬼（dementor）を撃退することを可能にする。そのような機能をもつ呪文が必ずしも「エクスペクト」と「パトローナム」という文言から成る必要はなく、ここに『大いなる遺産』の痕跡をみてとることもできるだろう。というのも、「エクスペクト」（ラテン語 expecto〈期待する〉の一人称現在形）は、『大いなる遺産』の原題 *Great Expectations* を想起させるし、「パトローナム」（ラテン語 patronus〈守護者〉の対格、語源は pater「父」）は、パトロン、すなわち〈金銭の援助者〉という意味を強く想起させる。呪文「エクスペクト・パトローナム」は、その効能と関係なく、〈父性〉を〈期待〉するハリー自身のテーマを端的に示すのと同時に、「大いなる遺産」を〈期待〉したピップの存在を示唆するのだ。

『炎のゴブレット』と『アーサー王の死』

第四作『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』（*Harry Potter and the Goblet of Fire,* 2000）は、トマス・マロリー（Thomas Malory）の『アーサー王の死』（*Le Mort d'Arthur,* 1485）を下敷きにしているはずだ。アーサー王伝説に着目した研究は複数あり、クレティアン・ド・トロワ（Chrétien de Troye）の『パーシヴァル』（*Perceval*）と比較したもの（Arden）、『ガウェインと緑の騎士』（*Sir Gawain and the Green Knight*）と比較したもの（Groves 39–50）などがある。『アーサー王の死』に言及したものとしては Morris のものがあるが、本稿で論じる聖杯伝説に関して Morris は、「炎のゴブレット」や三大魔法学校対抗試合の優勝杯など、杯の共通性を指摘する程度である。

『炎のゴブレット』で、ハリーの前に繰り返し現れる杯の背後には、確かに、一連のアーサー王伝説があるのだろう。騎士たちの前に現れては姿を消す聖杯

に呼応するかのように、『炎のゴブレット』にも次々と杯状のものが登場する。まずは、クィディッチ・ワールドカップの優勝杯である。これは観戦に訪れたハリーらの前でアイルランド代表チームが手にしている。更に、後に行われた三大魔法学校対抗試合の勝者が手にするのも優勝杯であった。こちらは、主人公ハリーが、もう一人の出場者セドリック（Cedric）とともに掴み取ることになる。特筆すべきは、本作のタイトルにもなった「炎のゴブレット」である。三大魔法学校対抗試合の出場希望者はゴブレットの中に氏名が書かれた紙片を入れるのだが、代表選手を選出するのは（人ではなく）このゴブレットである。この機能をわざわざ杯の形をした「炎のゴブレット」に与えたことは、本作の基底に聖杯伝説があることの決定的な証拠だろう。

しかし、『炎のゴブレット』において、『アーサー王の死』の影響を最も直接的に受けているのは、もう一つの杯、ヴォルデモートが復活を遂げる大釜である。弱体化した宿敵ヴォルデモートは、赤子のような姿としてハリーの前に現れ、その鍋の中に入れられることで、成人男性の姿として復活するのだが（692–97; ch. 32）、『アーサー王の死』においても、騎士ガラハッド（Galahad）の目の前で、聖杯の中に入れられた赤子がキリストに似た男へと変貌を遂げている。その際、聖杯には血の滴る槍が立てかけられていたのだが（Malory, 364–66; Book XVII, ch. 20）、このモチーフは、ハリーの血がヴォルデモートの肉体の原料として大釜の中に注がれるくだりに引き継がれている。

『炎のゴブレット』の物語の中心には、憧憬と探索というテーマがある。ハリーの前に現れる杯は、その都度、ハリーの功名心を刺激するものとして現れる。クィディッチ・ワールドカップは未来の憧れとして、三大魔法学校対抗の出場権をかけたゴブレットならびに優勝杯は現実的な憧れとして。ハリーが胸に抱く衝動は、アーサー王の宮廷から旅立っていった円卓の騎士から継承されたものなのである。

『不死鳥の騎士団』と『マクベス』

第五作『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』（*Harry Potter and the Order of Phoenix,* 2003）は、シェイクスピア（William Shakespeare）の『マクベス』（*Macbeth*, 1606）と多くを共有している。『不死鳥の騎士団』に関しては、Jacobs によって『ヘンリー四世』（*Henry IV*）の影響が指摘されているほか、予言をめぐる展開が、『マクベス』に由来するという Groves の指摘もある（86–90）。Groves は、予言を妄信するマクベスと、同じく予言に執着するヴォルデモートを重ね合わせているのだが、本稿ではマクベスをヴォルデモートではなく、ハリーの原型として検討してみたい。

戯曲『マクベス』は、武将マクベスが、主君ダンカン王（King Duncan）を暗殺し、王位を簒奪する物語である。劇の中心には、王を暗殺するマクベスの逡巡と、殺害後の彼の良心の呵責がある。マクベスを悩めるハリーに、ダンカン王を校長ダンブルドアに置き換えることをローリングは着想したのだろう。『不死鳥の騎士団』で、連日の悪夢にうなされるハリーは、王殺しを企てたマクベスの如く、目の前のダンブルドアを襲撃したいという抑えがたい欲求を感じることになる（419; ch. 22）。この異様とも言える衝動はヴォルデモートの精神と同期することによって引き起こされているのだが、ヴォルデモートと同一化することによって、ハリーは親友ロンの父親アーサーの襲撃を疑似体験しさえする（408–09; ch. 21）。

襲撃されたアーサーの原型は、『マクベス』の物語におけるバンクォー（Banquo）であるのかもしれない。マクベスは、共に戦果をあげたバンクォーの子孫がやがては王になる、という予言を聞いて不安になり、バンクォーとその息子の殺害を企てる。『不死鳥の騎士団』にも、アーサーの息子ロンが手にした権力にハリーが嫉妬する場面がある。ロンは校長ダンブルドアから監督生に任命されるのだが、この事実を知ったハリーは、自分が選ばれなかったことに憤りを感じるのだ（147–52; ch. 9）。また、本作において、ロンは王のイメー

ジと不自然なまでに結び合わされもする。彼はクィディッチのプレイが不甲斐ないことを宿敵スリザリンの生徒から嘲笑されるのだが、その時、スリザリン側は、皮肉をこめて、「ロンはわが王者」（Weasley is our king）という歌を作る。このフレーズは王冠型のバッジとして流通し（358; ch. 19）、更には彼が奇跡的な活躍をみせると、賞賛するグリフィンドール生から合唱されるに至る（619; ch, 30）。『マクベス』における、バンクォーの死とやがて王になる子孫の話は、『不死鳥の騎士団』において襲撃されたアーサーと監督生になる息子ロンの話に引き継がれたのだろう。殺害されたバンクォーと違い、アーサーは手当の末に一命をとりとめることになるのだが、ローリングはアーサーをこの巻で殺すつもりだったという証言を残している（Rowling, Harry Potter Wiki）。この発言は、彼女が当初、『マクベス』のストーリーに忠実であろうとしたことの証左であろう。

マージ、アーサー、吸魂鬼 ── 侵入する英文学

『ハリー・ポッター』シリーズの第三、四、五作は、それぞれ『大いなる遺産』、『アーサー王の死』、『マクベス』といった英文学作品を換骨奪胎して作られている。あるいは、各作品に、それらの英文学作品が侵入していると言うことも可能かもしれない。

各『ハリー・ポッター』作品は、ハリーが夏休みを過ごす叔父のダーズリー家から始まるのだが、ここを訪れる招かざる客こそが、各英文学作品由来の人物であることは指摘しておかねばならない。たとえば、第三作『アズカバンの囚人』ではハリーの叔母であるマージ（Merge）がダーズリー家に滞在している。ウィスキーを飲みながら悪態をつくマージにハリーは怒りを爆発させ、彼女を風船状に膨らませてしまう（29–38; ch. 2）。一方、『大いなる遺産』では、クリスマス・ディナーに訪れ、説教を始めた叔父パンブルチュークが、ピップが混入させたタールの入ったウィスキーを危うく飲み干すことになる。第四作

『炎のゴブレット』では、ハリーを迎えに来るべく、ウィーズリー一家がダーズリー家を訪れ、さんざん迷惑をかけた後で、父アーサーが一人残って、その始末をつける（51–59; ch. 4）。アーサーという名前は『アーサー王の死』の主人公と無縁ではあるまい。更に第五作『不死鳥の騎士団』では、ダーズリー家の近所に吸魂鬼が出現する。北海の監獄アズカバンから現れた吸魂鬼をハリーが撃退するエピソードの背後には（21–23; Ch. 1）、スコットランドを急襲したノルウェイ軍を蹴散らした勇将マクベスの武勲があるのだろう。

マージ、アーサー、吸魂鬼 ── ダーズリー家に侵入する者たちは、『ハリー・ポッター』シリーズに侵入した英文学作品の確かな痕跡なのだろう。ローリングが自作に英文学作品を招じ入れる際の暴力性をそこに見出すこともできるのかもしれない。

Bibliography

Arden, Heather. and Katheryn Lorenz. “The Harry Potter Stories and French Arthurian Romance.” *Arthuriana* 13. 2 (Summer 2003): 54–68. Print.

Colbert, David. *The Magical Worlds of Harry Potter: A Treasury of Myths, Legends, and Fascinating Facts*. New York: Berkley Books, 2002. Print.

Dickens, Charles. *Great Expectations*. Ware: Wordsworth Classics, 1992. Print.

Granger, John. *Harry Potter’s Bookshelf: The Great Books behind the Hogwarts Adventures*. New York: Berkley Books, 2009. Print.

Groves, Beatrice. *Literary Allusion in Harry Potter.* New York: Routledge, 2017. Print.

Harry Potter Wiki. “Arthur Weasly” Web. 10 Jan. 2020.

Jacobs, Kathryn. “Harry ── Is that Potter, Percy, or Plantagenet?: A Note on Shakespeare’s *Henry IV* in the Transitional Novels of J. K. Rowling.” *Borrowers and Lenders* 1 (2006). Web.

Malory, Thomas. *Le Morte d’Arthur*. Harmondsworth: Penguin Books, 1969. Print.

Morris. Phyllis D. “Elements of the Arthurian Tradition in *Harry Potter.*” Web. 10 Jan. 2020.

Parker, Ian. “Mugglemarch: J. K. Rowling Writes a Realist Novel for Adults.” *The New Yorker.* Web. 10 Jan. 2020.

Rowling, J. K. *Harry Potter and the Order of Phoenix*, London: Bloomsbury, 2003. Print.

——. *Harry Potter and the Goblet of Fire*, London: Bloomsbury, 2001. Print.
——. *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. NY: Arthur A. Levine Books, 2005. Print.
——. *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban,* London: Bloomsbury, 2001. Print.
Shakespeare, William. *Macbeth*. New York: Penguin Books, 2000. Print.
Spencer, Richard A. *Harry Potter and the Classical World: Greek and Roman Allusions in J. K. Rowling's Modern Epic*. North Carolina: McFarland & Company, Inc., Publishers, 2015. Print.